

島根大学プロジェクト研究推進機構 『萌芽研究部門』		平成18年度 年度報告書		提出日 平成19年2月16日
① プロジェクト名	島根県における歴史的文化遺産の景観復原に関する学際的研究－石見銀山・出雲大社・松江を中心として－			
② プロジェクトリーダー	船杉 力修	所 属	法文学部	
		電子メール	funasugi@soc.shimnane-u.ac.jp	
③ プロジェクトの概要	(プロジェクトの最終年度における到達目標を簡潔に記入してください)			
	<p>本研究は、島根県に残る歴史的文化遺産のうち、石見銀山・出雲大社・城下町松江を中心に、絵図・古文書を通して文化遺産の景観復原を行うものである。本県では世界遺産登録を目指している石見銀山をはじめ、わが国でも有数の伝統的文化景観が多く残存しているが、そうした景観を総括的に押さえた研究は少ない。本研究では、景観を復原する素材として、広島大学図書館所蔵の「中国五県土地・租税資料文庫」のうち明治初期作成の地籍図及び、地域に残る関連史料を使用する。本研究では平成16年度に地域と連携し開催した絵図展の実績をふまえ、明治初期の絵図および関連の史料を撮影・調査することにより、伝統的な文化遺産の景観を復原し、地域の経済・社会構造を読み解き、島根県の文化・社会の特徴を総合的に明らかにすることを目的とする。平成17年度から世界遺産登録にむけて準備が進められている石見銀山を中心に、絵図及び関連史料の調査を通して、鉱山地域の繁栄について、地域的視点だけでなく、国際的視点からも考察を進めてきた。また今年度からは歴史的景観が残存し、全国から観光客が集まる出雲大社・松江を事例として調査研究を進めている。今後は石見銀山を中心に、鉱山の採掘前、採掘後、そして鉱山の将来を見据えた文理融合の総合研究を目指している。最終年度における具体的な到達目標は以下の通りである。</p> <p>(1) 絵図の撮影・デジタル化および関連史料の調査の実施 (2) 絵図に記載される文字の解読、記載内容の分析(島根大学) (3) 絵図に関する聞き取り調査及び古文書調査(大田市・出雲市・松江市と連携) (4) 調査成果の公開、利活用についての研究(地元自治体と連携) (5) 調査成果に関しての報告書またはパンフレットの刊行 (6) 調査成果に関してのシンポジウムまたは研究会の開催</p>			
④ プロジェクトのメンバー及び役割				
氏名	所属(職)	本年度の役割分担		
船杉力修	法文学部社会文化学科 助教授	本研究の総括・事務局		
作野広和	教育学部共生社会教育講座 助教授	絵図及び古文書の利活用に関する研究		
小林准士	法文学部社会文化学科 助教授	絵図及び古文書の解読・記載内容の分析(近世)		
竹永三男	法文学部社会文化学科 教授	絵図及び古文書の解読・記載内容の分析(近代)		
塩川銀三	附属図書館 図書情報課長	広島大学図書館との調査・公開に関する協議		
⑤ 本年度の研究計画と目標	(本年度当初の計画書に書かれた内容に沿って、計画と達成目標を簡潔書きにしてください)			
	<p>(1) 城下町松江および出雲大社周辺の絵図の写真撮影、デジタル化(広島大学図書館):本プロジェクトメンバーおよび学外関係者ととも、広島大学図書館所蔵の絵図のうち、撮影する絵図をピックアップし、撮影、およびデジタル化を行う。</p> <p>(2) 絵図に記載される文字の解読、記載内容の分析(島根大学):昨年度撮影した石見銀山関係絵図を含めて、デジタル化の終了した絵図から、関係者ととも文字の解読・内容の分析を行う。</p> <p>(3) 絵図に関する聞き取り調査及び古文書調査(大田市・出雲市・松江市):絵図に記載された地域を対象に、地元自治体の協力を得ながら、引き続き現地調査(聞き取り調査)を実施する。また対象地域において、絵図に関係した史料調査を実施する。</p> <p>(4) 調査成果の公開、利活用についての研究(島根大学):現地での調査と並行して、成果の公開方法や利活用について、適宜関係自治体と協議しながら、プロジェクトメンバーで検討を行うこととする。今年度は適宜研究会を開催し、研究成果について議論を行なう。デジタル化した資料は、Web上で学内外に公開することを目指しつつ、将来の研究の基盤づくりを行なう。また2年間の研究成果を、報告書またはパンフレットとして公表したり、さらに成果の一部を学術論文としてまとめたりすることを目指し、将来の研究プロジェクトの土台とする。</p>			

⑥ 計画の達成状況と自己評価 (前項で記載された計画の達成状況を項目毎に記載してください。また、年度目標に対する達成状況を項目毎に以下の基準に従って自己評価してください。A:目標以上に成果をあげた、B:ほぼ目標通りの達成度で予定した成果をあげている、C:計画より遅れ気味であるが年度末には目標達成が可能である、D:年度末までに目標達成は不可能である。Dの場合はその原因と対応策についても記載してください。2～3月に行う計画のため未執行の場合には評価は空欄にしてください)

- (1) A:7月27日広島大学図書館を訪問し、該当地域の絵図を調査、撮影し、撮影絵図の画像統合など、デジタル化にむけた作業を進めた。特に城下町松江の絵図は、予備調査の段階で確認できなかった絵図資料が確認され、全国的にみても貴重な絵図であることが確認された。また出雲大社周辺の絵図では、門前町集落の景観を示す絵図が確認された。さらに調査の過程で、隠岐の絵図・史料や近世の日本図などこれまで未発見の絵図も新たに見つかり、地元自治体と協力しつつ、デジタル化を行った。
- (2) B:7月27日広島大学図書館での調査、およびその後の大学での絵図の検討によって、記載内容の分析を進めた。特に石見銀山についての成果は、9月22日に大田市内で開催された第3回島根大学サイエンスデリバリーで発表し、新聞でも大きく報道された。
- (3) B:7月27日の調査で、島根県および松江市担当者とともに記載内容について聞き取りおよび調査成果の情報交換を行った。9月6日に石見銀山調査関係者と現地調査および成果についての情報交換を行った。10月14日には出雲大社周辺で現地調査を行った。11月14日には城下町松江の現地調査を実施した。さらに今年度後半には、史料調査として、絵図とほぼ同時期に作成された『郡村誌』(島根県立図書館所蔵)を調査を開始し、現在も調査を続けている。
- (4) B:産官学(大田市、松江市、広工など)と連携し、昨年度に続き、調査成果の公開方法について検討を行った。現在附属図書館のホームページで学内限定で成果を公開し、年度末にむけて一般公開の準備を進めている。年度末には附属図書館に大型のプラズマディスプレイを設置し、研究成果の一部を公開することとなっている。これまでの調査成果および昨年度の公開講演会の記録として、島根大学附属図書館編『絵図の世界—出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図—』を8月に出版した。マスコミなどでも大きく報道され、出版した1500部ほとんど完売した。

⑦ 公表論文、学会発表など (別途添付していただく個人調書の中から年度末までに発行される学術雑誌等(紀要も含む)に掲載が確定しているものも含め、代表的なものを10件程度選んでください。発明等に関しては差し支えない範囲で記載してください)

(1) 公表論文など

- ① 『絵図の世界—出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図—』、島根大学附属図書館編(プロジェクトメンバーが編集)・発行、2006年
- ② 船杉力修「松江城下町における景観復原に関する一考察—デジタル化を通して—」(発表要旨)、人文地理58-4、2006年

(2) 学会発表など

- ① 船杉力修「松江城下町における景観復原に関する一考察—デジタル化を通して—」、人文地理学会歴史地理研究部会、神戸大学文学部、2006年
- ② 小林准士「三谷家老日誌を読む」、松江藩講座、松江市総合文化センター、2006年
- ③ 小林准士「大森町の町役人と文書管理システム」、島根大学法文学部山陰研究センター公開研究会、島根大学法文学部、2007年

⑧ 外部資金の獲得状況、その他、特筆すべき成果 (シンポジウムの開催、産学連携・地域連携に関する各種見本市、展示会への出展なども含む)

(1) 外部資金の獲得状況

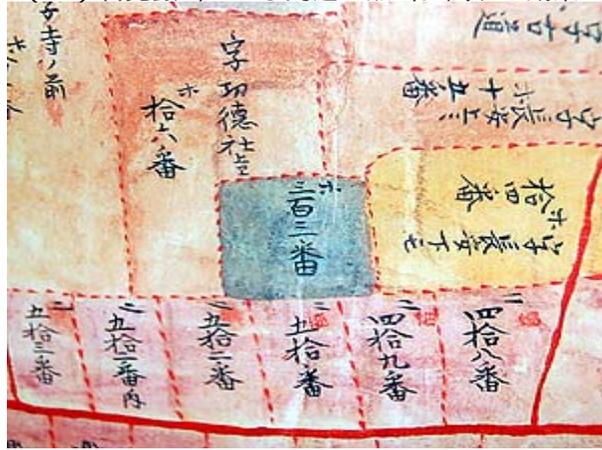
- ① 船杉力修(研究代表者):平成18～20年度科研・若手研究(A)「城下町の景観の動態的変容に関する歴史地理学的研究」1800万円(今年度660万円)
- ② 小林准士(研究代表者):平成17～20年度科研・基盤研究(B)「銀の流通と石見銀山周辺地域に関する歴史学的研究」1020万円(今年度280万円)
- ③ 附属図書館:島根大学政策的配分経費(教育基盤設備充実経費):「デジタル化資料閲覧システム」240万円(法文学部から申請、附属図書館で採択)

(2) その他

- ① 昨年度附属図書館で開催した絵図展及び講演会(プロジェクトメンバーを中心に、島根地理学会・島根史学会と連携し、研究成果の一部を展示、報告)の研究成果の報告として本を出版した。マスコミにも大きく取りあげられ、地元からも大きな反響があった。
- ② 調査成果の一部を、第3回島根大学サイエンスデリバリーで発表した。参加のアンケートの結果、大きな反響があった。またマスコミでも大きく報道された。
- ③ 広大所蔵絵図だけでなく、調査の過程で発見された県内に残る絵図(「三国通覧図説付図」,「隠岐島前海岸測量図」など)や隠岐の近世文書(池田家文書)などもあわせてデジタル化した。大学所蔵資料だけでなく、地域に残る資料を発掘し、一般公開するのは全国の大学でも画期的であり、地域文化の発展に大きく貢献した。

⑨ 本年度の主要な研究成果(図, 表, ポンチ絵などを多用して, 2ページ以内にわかりやすくまとめてください)

(1) 石見銀山および周辺の鉱山に関する成果



今年度は石見銀山周辺の絵図を検討した。萩原村絵図では、銀山街道の宿場町の景観が初めて明らかとなった。街道沿いに短冊状の地割が検出されたほか、米屋、紺屋、大工、鍛冶屋などの地名がみられ、かつて「萩原千軒」と呼ばれた繁栄の様子が明らかとなった。さらに久喜村と大林村(現在邑南町)絵図では、石見銀山とともに、銀山奉行大久保長安により採掘された、久喜鉱山の景観が初めて明らかとなった。短冊状の地割のほか、町屋敷、大吹田、向市など鉱山集落の景観を示す地名がみられた。大森・銀山地区だけでなく、周辺地域も発展していたことが明らかとなった。今後石見銀山周辺の鉱山や街道などについても視野に入れる必要があるといえる。

(2) 城下町松江に関する成果



城下町松江と門前町杵築は今年度より新たに着手した。これまでの島根県立図書館による調査では見つからなかった絵図が新たに発見された。特に絵図のなかに借家まで記載されているのは全国的にも珍しいといえる。江戸後期の町絵図と比較すれば、まだ未解明なテーマである、明治維新をはさんで、城下町がどのように変容をとげるのかを明らかにすることができると思われる。さらに城下町南部の白濁地区では、たたら製鉄の経営者桜井家、田部家などが屋敷地をかなり所有していることが分かった。今後たたら製鉄を中心とした鉱山業と城下町との関連について研究していく必要があると思われる。

(3) 出雲大社門前町杵築に関する成果



出雲大社の門前町杵築では、御師が集住していた越峠と、海岸からの参詣道にあたる仮宮の絵図が確認された。出雲大社の門前集落の景観がこれほど詳細に明らかになるのは本研究が初めてである。越峠の絵図では、道が交差する四つ角を中心に集落が形成されている。関連史料とあわせて検討したことにより、出雲大社の門前に向かって、参詣者を迎える御師の屋敷が建ち並んでおり、他の屋敷に比べても敷地が広くなっている。他の屋敷は短冊状に整然と並んでいる。門前町杵築では、御師が勢力をもっていたことが明らかになりつつある。今後出雲大社周辺のまちづくりに活用への展開が考えられる。

⑨ 本年度の主要な研究成果(続き)

(4) その他の成果

堀尾期松江城下町絵図の分析について

上記絵図について、附属図書館長、神戸大・和歌山大・東亜大教授の指導のもと、絵図の作成年代について検討を行った。その結果、絵図の描き方の分析、そして科学分析により、堀尾期に作成されたことが明らかとなった。また城下町中心部は後の時代の絵図と比較しても非常に正確である一方で、城下町南部の雑賀町は松平期の地割と全く異なっており描かれていることから、この絵図は城下町形成期の都市計画図として作成されたのではないかとの注目すべき見解も出た。現在市内では発掘調査も実施されていることから、城下町の形成、発展について、総合的に明らかにする必要があると思われる。



地域に残る絵図の発見、デジタル化

調査の過程で、県内各地に残る絵図が新たに発見された。出雲市内で発見された絵図は、林子平と長久保赤水の絵図を丁寧に筆写したもので、江戸後期における庄屋クラスの地理的認識は予想以上に広がったことが明らかになった。さらに隠岐では、島前、島後の海岸測量図が発見された。幕末に海岸警備のため幕府の命により全国各地で作成されたが、現存しているものは少ない。島根県では初めての発見である。港の記載だけでなく、神社寺院などの記載もみられ、隠岐における地域研究の基礎資料となる。



地域との連携、絵図・文献資料の保存技術

プロジェクトの展開にあたっては、地域と連携が必須となる。関連資料である近世後期の松江の町絵図については、国文学研究資料館、元興寺文化財研究所の指導のもと、松江市教育委員会と連携し、絵図の貼り紙の剥離作業を行った。絵図の研究と長期の保存のために実施したものである。また隠岐では、調査の過程で、松江高専など地元研究者と連携し、絵図の修復の指導・斡旋、絵図・文献資料の整理・解説・調査、資料の撮影・デジタル化、資料の保存対策の指導などを実施した。過疎化の進む石見、隠岐地方では資料の散逸が進んでおり、大学を中核とした地域連携がますます必要となってくると考えられる。



⑩【萌芽研究部門のみ】本研究をさらに発展させた重点研究への構想(図、表、ポンチ絵などを多用して、2ページ以内にわかりやすくまとめてください)

(1) テーマ：石見銀山を中心とした島根県における鉱業の総合研究

島根県では、世界遺産に登録される石見銀山を中心に、銀・銅・鉄など鉱業がかつて非常に盛んであった。そうした鉱業を、採掘する前、採掘した時代、そして将来へと、過去から未来へむけて文系・理系癒合した総合的な考察を行う。文理融合した総合研究は、総合大学である島根大学でしか実施することはできない。また研究成果は地域社会の発展にも大きく貢献できる。

(2) 文系での研究領域と位置づけ

鉱山そのものを研究するだけでなく、都市(城下町、宿場町、港町など)や街道など鉱業を支えた地域まで広範囲にわたって研究を行う。歴史学、地理学、民俗学、文学、考古学など学際的に研究を実施する。学際的かつ広範囲にわたり鉱業を位置づける研究は国内外にもほとんどみられない。本プロジェクトで得られた研究成果は、地元自治体や市民にむけて絶えず発信し、研究成果は博物館などでの展示に活用したり、歴史文化遺産をいかしたまちづくりにかすなど積極的に事業提案していくことも目指したい。

(3) 外部資金獲得の見込み

平成19年度、20年度は、プロジェクトメンバーの科研費が継続される予定である。地元自治体とも適宜連携し、共同研究を模索する。これまで委託研究などの外部資金も獲得してきたが、今後も学内外の研究助成には積極的に応募していきたい。

参考資料 研究終了後の高次研究プロジェクトへの構想

